



# RIKKYO SECOND STAGE

## Contents

- P1 セカンドステージ世代の社会的役割
- P2 2012年度入学式 P3 本科生の横顔
- P4~6 ゼミナール紹介
- P7 修了生の社会活動
- P8 サポートセンター・同窓会活動、フィールドワーク

立教セカンドステージ大学(RSSC)は、立教大学が提供する生涯学習の場です。RSSCは、RIKKYO SECOND STAGE COLLEGEの略称です。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」  
 編集責任：笠原清志 編集長：成田良一  
 発行日：2012年9月15日  
 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



## セカンドステージ世代の社会的役割

立教大学名誉教授  
鈴木 正男



授業の中で“1世代とは何年ぐらいのことを指しているのでしょうか？”と質問すると、“10年”(一昔)とか“60年”(一生・還暦)という答えが返ってきます。

人類誌を俯瞰してみますと1世代には約20年という時間の長さが割り当てられます。ですからアルプス山中の氷河の中から約5,300年前のミイラ“アイスマン”が発見され、そのDNAを受け継いだ女性が英国で発見されますと、“およそ250世代後のアイスウーマンですね”と、NHKの特番のナレーションが入る訳です(近頃の“初産は30歳超”という新聞記事は、人類誌的には“異常値”になります)。

とすると、日本人の平均寿命約80歳は、準備(次)世代(~20歳)、現世代(~40歳)、前世代(~60歳)、前々世代(~80歳)の4世代を含むこととなります。そしてこれを立教セカンドステージ大学(RSSC)に当てはめてみますと、入学の年齢制限は前世代の中間以後、在籍者の平均年齢は前々世代の前半にあることとなります。

この世代の社会的役割とは何でしょうか。

人はたった10年先のこともなかなかはっきりとは予測できませんし、普段考えたりもしないものですが、3.11

で明らかになったことは、環境を汚染した代表的な放射性核種セシウム137は半減期が30年で、国が定めた指針でもこの10倍の300年間は管理することになっています(放射能は1024分の1に減ります)。

1世代20年という時間の中でどうこうできる話ではないということです。

また、地球環境を考えてみても、資源(石油など)は間違いなく有限で、現代的・資本主義的に自然から最大限を収奪し、民主主義的に平等に分配すれば良いという話でもありません。だからこそ再生可能エネルギーへの移行を模索し、持続可能な社会の建設を目指しているのです。

近年の人類化石の研究成果では、人類が長寿となり“祖父母”が登場したのは約600万年の人類の歴史の中でも比較的最近の後期旧石器時代(約35,000年前~約13,000年前)のことであり、長寿化によって世代間情報の蓄積と伝達が促進され、社会進化に大いに寄与したとされています。

このことに考え至れば、前々世代が果たす社会的役割の中で最も期待されるのは、これまでの生き方・来し方を踏まえて、次世代へ世代間責任を継承し伝達することにあるということは言を俟ちません。

(立教セカンドステージ大学運営委員)

# 新しい出発と出会い

## 2012年度立教セカンドステージ大学入学式

立教セカンドステージ大学（RSSC）本科5期生（98名）、専攻科4期生（43名）の入学式が、2012年4月3日（火）午前10時30分より、池袋キャンパス諸聖徒礼拝堂（チャペル）で行われました。

当日は、娘や孫と一緒に、あるいはご夫婦での出席もみられ、パイプオルガンが厳かに演奏される中で、立教セカンドステージ大学への入学を喜び、尽きることのない学びへの情熱を再確認しました。学長やチャプレン長の訓辞、祝祷を受けて新しい出発への決意を胸に刻みました。



正門付近



チャペル入学式



吉岡学長



佐藤チャプレン長



### <立教セカンドステージ大学 入学式次第>

入堂 「聖歌317番」	アンセム Hymne d' Action de grâce "TE DEUM"
序祷 チャプレン宮崎 光	祝祷
訓辞 学長 吉岡 知哉	チャプレン長 佐藤 忠男
紹介 学長 吉岡 知哉	校歌 「栄光の立教」
聖書 チャプレン金 大原	退堂 「聖歌333番」
奨励 「建学の精神」 チャプレン長 佐藤 忠男	

## 立教セカンドステージ大学 入学して・通学して

### ☆共通プラットホーム・・・小山 哲男・小山 千賀子

私たち夫婦は、退職後のセカンドステージを送るに際し、同じ大学に通うことによって夫婦の共通プラットホームを再構築しようと思い立ちました。オープンキャンパスやインターネットなどによりいくつかの大学を調べた結果、RSSCへの入学を決意しました。入学後は、二人で同じ科目を履修する場合には互いの不明点を確かめ合い、異なる科目の場合には互いに情報交換を行っています。RSSCの授業科目は今までの私たちの生活では味わえないとても新鮮なものであり、また先生方も素晴らしく、充実した毎日を送っています。RSSCを修了した後の自分たちがどうなるか楽しみです。

### ☆福島県大震災の街から遠距離通学・・・佐久間 裕一

毎週水曜日に地元のロータリークラブに出席して正午に出発、車の中で気分をビジネスモードから学生に転換し常磐道・首都高を乗り継いで池袋、3時の授業に間に合うかどうかは渋滞次第、神のみぞ知る。現在8勝2敗と望外の結果。

暮らしている福島県いわき市は、震災、津波の被害を受けその上福島原発から50キロ圏、放射能を心配し子供が流出し、原発から20キロ圏内の住民が仮設住宅に入居・転入している。街は復興需要と原発の作業員の中継基地になっていることから好景気。反面津波の被害地は手付かずで瓦礫の山はますます高くなるのみ。5月の連休に近くの津波の被災地を訪ねたら住宅の基礎だけが残った

津波の広大な傷跡で住民がゴルフの練習をしていた。それを見て怒っていいものやら笑うべきか哀しむべきか複雑な心境になった。かようにいびつになった故郷に自分に何ができるのかをセカンドステージで学びたい。

### ☆最若手の通学生・・・金子 由紀

4月3日、立教大学の数多くの歴史が刻まれたチャペルにて、入学式が行われました。期待と夢がいっぱいの新入生を温かくお迎え頂き、とても厳粛で感動的な式となりました。いつもエネルギーにお導き下さる先生方と、51歳の私よりもはるかに若々しく、パワー溢れる人生の先輩である同級生の皆さんと過ごす毎日はワクワクが止まりません。少し肩の力を抜いて、充実したカリキュラムの授業を楽しみ、伝統あるキャンパスの四季を目と耳と心でゆっくり味わいたいと思います。

縁あって巡り合えた素敵な仲間と共に、RSSCで学ぶ喜びを満喫したいと願っております。

### ☆秋田の実家を離れ東京で仮住まい通学・・・佐藤 三男

私たち夫婦は志を持って秋田県から出て来ました。私はRSSCで学ぶため、妻は立教ラテ研の講座を受講するために。私の目的は今までの概念では捉えきれなくなってきた現代社会について学ぶこと、一方妻はグループでフォルクローレという南米の音楽をやっていて、ケチュア語と並行してスペイン語を学ぶため。それぞれ目的は違いますが、ここでの生活は充実していてとても楽しいです。重要なことは、今勉強したいと思う純粋な気持ちだと感じています。慣れないマンション暮らし(仮住まい)から始まった学生生活ですが、この大学で第二の人生の第一歩を踏み出すことができた幸せを噛み締めています。

## 2012年度本科生(5期生)の横顔

今年で5年目となる立教セカンドステージ大学の本科入学者(5期生98名)の横顔を、6月に実施したアンケート結果の概要をもとに紹介します。

本科1期生～本科5期生の入学者数と、本科5期生の人数、平均年齢など構成は右グラフの通りです。

本科1期生～5期生を通した入学者の年齢構成では定年後の60～64歳が過半数を占めています。本科5期生は年齢別では60～69歳が67%を占め、50歳代が22%、70歳以上が11%で、前期より男性が増加しています。

入学者の前職は会社員・役員が48%、主婦は前年より増加し15%、教員9%、自営業7%などとなっています。

通学状況は、週3～4日通学者が一番多く75%、毎日通学者が16%、仕事を続けながらの通学者は27%、また何らかのボランティア活動をしている通学者が31%と社会への参画意識の高さが窺えます。

入学者の居住地は首都圏が95%を占めますが、首都圏からでも通学時間が2時間以上の人もあります。遠方からでは長野、福島、秋田から通学している人もいます。

### 入学の動機

入学の動機としては「学び直し・生涯学習・大学での勉強」、及び「セカンドステージの生き方を勉強」が最も多く、次に、「規則正しい生活・次への充電時間」と「ネットワークづくり」という入学動機が続きます。

### 現在の感想

#### 入学後の良いところ

- ・「多様な職業・幅広い年齢の友達ができ、新たな知識や知らない世界の話を知ることができた」ことが一番。
- ・「授業内容がすばらしく面白い、個性的で信頼できる教員と興味深い講義」等が挙げられました。
- ・「立教大学の現役学生と一緒に勉強することで、新鮮で良い刺激を受けている」人も多数います。

#### 入学後に苦労していること

レポート・修了報告書の作成とパソコン等の操作に苦労されている人が多いようですが、大学では受講者の各種サポートを行っています。

1. パソコン教室開催(メール・Word等)
2. レポート・報告書の書き方等の説明
3. 専用ラウンジで受講生同士の勉強会

### RSSCを知ったきっかけ

4月の調査では新聞広告38%・ウェブサイト34%・知人等の紹介10%・新聞記事8%・大学発行物5%、会員誌・公開講座・図書館・その他が各1%前後。傾向としてウェブサイトを利用するケースが毎年増加しています。

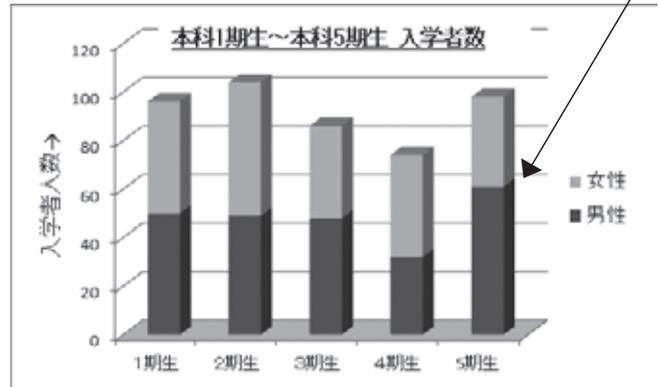
### アンケートまとめ

アンケート結果からは、入学者の多くが従来の個人活

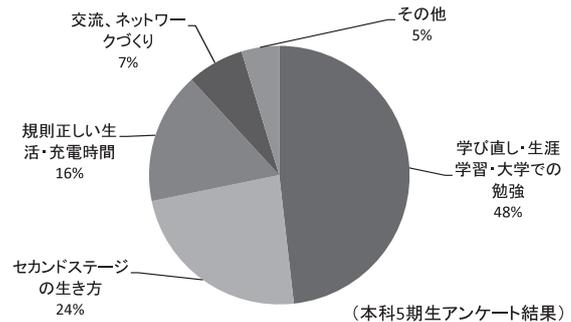
動と新たな学校生活との時間調整に苦労しながらも、「学びの情熱尽きることなく」という同じ志をもつ人たちとの新たな出会いや多様な人間関係の中で、個性的な教員の興味深い授業や新たな知識習得などにより、日々新鮮な刺激を受けている様子が浮かんできました。

#### 本科5期生構成

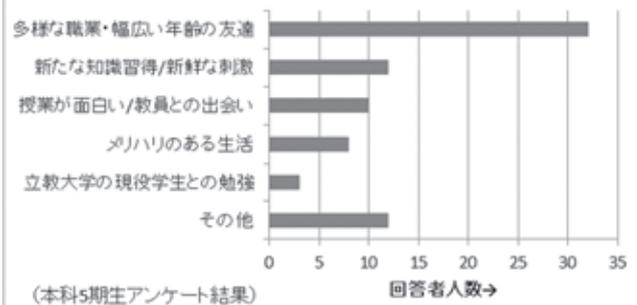
男性 61名(平均年齢 63.6歳)  
女性 37名(平均年齢 60.5歳)  
全体平均年齢 62.3歳



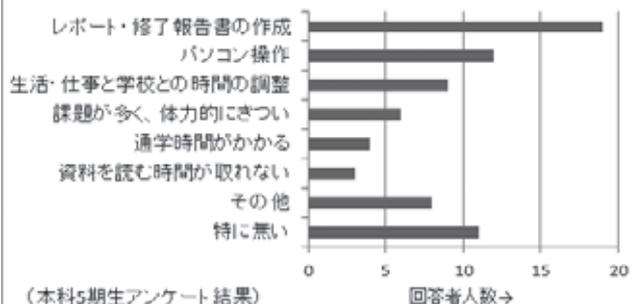
### 入学の動機



### 入学後の良いところ



### 入学後に苦労していること



## ゼミナール紹介

立教セカンドステージ大学では、本科生・専攻科生ともに、ゼミナールが必修科目になっています。今年も11のゼミナールが開講されています。担当教員の指導によるゼミと、受講生が自主的に行うサブゼミが隔週で行われています。そこで求められているのは「主体性」です。与えられるのではなく、受講生自身がプログラムを決めていくのが特長です。担当教員の専門テーマを、受講生同士が議論します。それと並行して、修了報告書(本科生)・修了論文(専攻科生)の提出に向けて、先生のアドバイスを受けています。

立教セカンドステージ大学では、いろいろな行事が行われます。清里合同合宿、クリスマスパーティー、ニューズレター制作、修了パーティーなどを、各ゼミから選出された委員が企画と運営にあたります。ゼミの活動が、受講生同士のつながりを深めていきます。

お互いに助言し、学びあうところは、他の社会人向け大学やカルチャーセンターにはない立教セカンドステージ大学の特色であり魅力です。



## 木下ゼミ

### ◆成熟社会学・笑いあり、主張あり、涙あり。

前期必修科目「高齢社会から成熟社会へ」も担当されている木下先生のゼミ。本科生9名、専攻科生2名(男性2名・女性9名)で、なんと女性比率82%!でも、男前の女性も多く、和気あいあいとやっています。

木下先生は社会老年学の第一人者。フィールドワークに基づく質的研究の分野で、注目の手法を開発されています。

前期は、その著書『質的研究と記述の厚み』を読んでディスカッションを行い、手法を学びました。立教大学の社会学部の学生さんとの交流の機会も設けていただき、刺激を受けています。

木下先生が、RSSCの発展に並々ならぬ情熱を注いでいらっしゃることを受講生たちも感じ取り、飲み会でも「5期と言えばひとつの節目。先輩たちが築いてきたRSSCを、私たちでさらに盛り上げよう!」と、活発な意見を交わしています。

全員が主体者として参加していけるゼミをめざし、後期にむけて、さらにパワーアップ中です!



## 笠原ゼミ

### ◆社会学・組織論・NPO/NGO論

笠原ゼミは、本科生8名と専攻科生8名、(男性9名・女性7名)のバランスの良い構成です。笠原先生は若い頃にユーゴスラビアへ留学し、その後の研究活動もポーランド、ハンガリー、バングラデシュ、中国など国際経験豊富な先生です。ハンガリーの「ロマの女性支援プロジェクト」のヒアリング経験



やバングラデシュでの「マイクロクレジット(無担保小口融資)による貧困対策を行うグラミン銀行との交流などから、己の力と尊厳によって未来を切り開くことの大切さを熱く語られます。また日本の地理的特性と政治・文化との関連、知の形態、3.11後の東北復興の問題点など幅広いテーマで問題提起をされ、私たちの意見を求めます。自主ゼミでは関連テーマのビデオ鑑賞後にみんなで議論を深めています。ゼミ終了後は先生を囲み、ジョッキ・ワイングラスを手にして様々な話題に花を咲かせ、時間の経つのも忘れて語りあっている教養あふれる楽しいゼミです。

## 千石ゼミ

### ◆文学・アート・思想・歴史

千石ゼミは、本科生・専攻科生各8名(男性10名・女性6名)の構成です。先生のご専門はアメリカ文学ですが、哲学、思想、アートなど幅広い分野に精通された、まさに知

の巨人。しかし学者ぶらないチャーミングな輝く笑顔に励ま

され、気後れしそうなゼミ生も巻き込んで、アカデミックな雰囲気の中でゼミが展開されています。先生の「竹の子理論」は、地面に顔を出す寸前の、新鮮でおいしい竹の子(テーマ)を各自が掘り起こすというもの。この理論のもと、それぞれが修了報告書・修了論文に繋げていこうとしています。文学、歴史、映画、写真、茶道など、ゼミ生の得意分野はバラエティに富んでいて刺激がいっぱい。皆で映画を観賞したり、美術館を訪ねたりしながら互いの向上を図り、好奇心が広がる交流の場になりつつあります。「『分からない』は禁句。恥をかくことが大切」との先生の慈愛あふれるご指導のもと、個性豊かなゼミ生が切磋琢磨しています。



## 渡辺ゼミ

### ◆日本の詩でディベート

渡辺信二先生は『ニューズレター7号』の巻頭言で、「老いて学べば、則ち死すとも朽ちず」という江戸時代の儒学者佐藤一斎の言葉を引用されています。問い続ける姿勢を持つことが、セカンドステージに入学した意味があるということです。



渡辺ゼミは本科生11名、専攻科生2名（男性7名・女性6名）で構成されています。先生は文学部教授で、専門はアメリカ詩ですが、最初にいただいたのは、日本の詩でした。これを材料に肯定派と否定派に分かれてディベートをします。グループ分けは自分の判断とは別で、どちらに入るかはわかりません。そのため、良い点、悪い点を自分たちで考えなくてはなりません。相手の話を聞いて論争をして、根拠に基づいて話し、相手を論理的に納得させるのです。自主性を重んじる先生は、受講生同士の議論にまかせながら、ユーモアを交えながらアドバイスをしてくれますので、教室には笑いが絶えません。

## 古賀ゼミ

### ◆日本経済論・産業構造論

古賀ゼミのメンバーは、本科生12名、専攻科生3名（男性13名・女性2名）の構成です。日本経済・産業の構造分析が専門の先生のもとに集まった15名の出身は、研究機関職員、外資系、企業役員、自営業…と多彩な経歴でかつ異年齢集団。お互いの業界経験を語り合うだけでも、これまで知らなかった沢山の事を教えられて大変有益です。



ゼミは談論風発。「歴史を客体としてみる」という古賀先生の指導のもと、「20世紀の日本」についての一冊の本を輪読し、各回報告者のレジュメをもとに話が進みます。それぞれが学んできた歴史への思いから議論が侃々諤々、熱く盛り上がることも…。しかしゼミ終了後は、親睦会に繰り出し、恒例のビールで乾杯。しばしば先生も加わって、飲んで食べて話が進み、楽しい時間です。

それぞれの個性を尊重した雰囲気の中で、それぞれの研究テーマについての意見を交換し、修了報告書・修了論文の完成を目指しています。

## 橋本ゼミ

### ◆高齢者福祉・施設ケア・介護保険

橋本ゼミは本科生のみ7名（男性4名・女性3名）の構成です。ほかに男女各1名のティーチングアシスタントがおり、いろいろ助言していただきます。写真は、「高齢者福祉施設の現場を見よう」ということで、先生がホーム長をなさっている立川至誠ホームで、私たちゼミ生が6月に体験学習をした時の



ものです。当日はホーム61周年「感謝の集い」が行われた日でもあり、私たちはボランティアとして、車椅子を押して入居者の移動のお手伝いをしました。初めて体験する人が多く、気疲れはしましたが、いい経験になりました。また、文献を読んで討論したりしながら、大きな視点で高齢者の生活と幸せについて考えています。

8月にはマホロバマイズ三浦海岸で1泊2日の合宿を行い、修了報告書の中間発表をしました。ゼミ後の交流もしっかりやり、時には神宮球場で若い学生といっしょに東京六大学野球の応援をしたりしながら、真剣かつ楽しく学んでいるゼミです。

## 庄司ゼミ

### ◆家族論・ジェンダー論・福祉政策論

大学を卒業後、一度は就職したが「再チャレンジ」を求めて学び直しを決めた庄司洋子先生。そんな生涯学習の先駆者が、学ぶことに飢えているシニア層をしっかりと受け止めてくれます。「専門分野にとどまらず、(留学された)米国での生活や家庭の話など広がりがあった楽しい」「奥行きのある温かな



ご指導」「的確なアドバイス」。これらは本科生11名、専攻科生4名（男性6名・女性9名）の共通した先生評です。

修了報告書は自由テーマで、生まれ育った土地の歴史と文化を調べる人、熟年夫婦の有り様を研究する人、ミッフィーの絵本を取り上げる人など様々です。聞く時は淡谷のり子、語り口は岸田今日子。庄司ワールドが醸し出すほのぼのとした雰囲気の中で、皆で気持ちよくサポートしあえる関係が築かれています。授業後は「ビール、ワイン、焼酎なんでもいいわよ」という先生を囲み、やさしくジェンダー論が繰り広げられていきます。

## 鈴木ゼミ

### ◆人類年代学・原子力とエネルギー問題・イースター島

鈴木ゼミは、本科生12名（男女各6名）、先生の温かい人柄と語り口で、いつも楽しいゼミとなっています。

鈴木先生は、東大理・同院・人類学専攻修了、理博、立大名誉教授で、ゼミでは「ヒトとは何か」を中心課題に、昨年来不安が続く原発事故、先生が管理室長を務める立教炉



（横須賀）の廃炉作業の状況、更にイースター島モアイ文明の盛衰と地球環境問題などを学習しています。

かつて森林に覆われていたイースター島は、住民が巨大石像モアイを運ぶ資材や薪あるいはカヌー製作の素材として木をすべて伐採し、鳥類等の蛋白源も乱獲・枯渇し、増大した人口が養えなくなって、果ては内戦の末モアイ文明は衰退したのです。人類もエネルギー、気候温暖化等の問題を解決できなければ、同じ運命をたどるのではと危惧されています。8月にこの環境問題の聖地イースター島を鈴木先生とゼミ生が訪問し実地で学習しました。

## 横山ゼミ

### ◆心を深層から変革して人生を自由に爽快に生きる

このメッセージは私のゼミ担当の横山紘一先生の言葉です。先生は唯識思想・仏教心理学・インド哲学を40年以上も研究され、当校でも講義「心の変革」を担当されております。

又、唯識思想の普及を目指し各地で講演会もなさっておられます。

講義で「心の深層（阿頼耶識）」に善の種子

を熏習させる。心の深層から変われば人生を爽快に生きられる、と説かれます。まだその心境には至りませんが、来春には理解できる私でありたいと願っています。

ゼミは本科生6名、専攻科生3名（男性7名・女性2名）です。ゼミでも「心の変革」を学び、社会問題を討論する等充実した内容で勉強になります。更に深い親交を求め、先生の格言通りに「すべての道はアルコールに通じる」に則り、終了後池袋の街に繰り出しお酒を酌み交わし、ここでも人生を語り討論しています。今ふたたび学び討論できる学生生活をエンジョイする毎日です。



## 坪野谷ゼミ

### ◆金融論・『人生を楽しく』がモットー

坪野谷ゼミは、本科生4名、専攻科生12名（男性10名・女性6名）の総勢16名です。ゼミ生は皆、坪野谷先生の細心、慎重かつ大胆、実践的それでいて人情味あふれるお人柄にひかれて本ゼミを選びました。特に、先生は女性には優しいので、女性の坪野谷ファンが集まりました。

ゼミでは先生が経済、政治、社会、趣味、生き方につき最近の新聞論調を紹介しながら、丁寧な解説並びに先生のお考えを述べられ、ゼミ生のそれらに関する疑問なり質問を、我々のレベルに合わせて説明されます。現下の経済社会状況の把握はもとより趣味や生き方についても非常に参考になっています。

一方サブゼミでは毎回3名のゼミ生が自分の興味ある研究を10分から15分間で紹介し、それにつきゼミ生が忌憚ない意見を交換し合って、先生のモットーである『人生を楽しく』を実践しています。今年の夏休みも恒例のWebによるVirtual Seminarを開催しました。



## 鳥飼ゼミ

### ◆通訳翻訳論・異文化コミュニケーション論・英語教育論

今年から初めてスタートした鳥飼ゼミは、本科生9名、専攻科生1名（男性8名・女性2名）の10名です。一言で、形式にとらわれない自由な発想を尊重するゼミと言えます。ゼミ生は隔週持ち回りでコミュニケーションをテーマに発表を行っています。鳥飼先生からは「このゼミはコミュニケーションとい

う言葉がキーワードです。多様性はありながら、それぞれがコミュニケーションの諸相について自らの体験をふまえて語る内容の深さは圧巻です」というコメントを頂きました。年齢、経歴もまちまちなゼミ生のテーマは身近な職場や家庭から、外国語、異文化についてまで幅広く飽きることはありません。昨今の日本企業での英語の公用語化、英語資格試験の意味についても関心が高く熱い意見交換がなされています。発表のたびに、それぞれの捉え方や考え方の違い、驚きや新たな発見があり和やかで楽しいゼミです。



## 修了生の社会活動

立教セカンドステージ大学 (RSSC) は開校5年目を迎え、本校を卒業した修了生は様々な社会活動をしています。その修了生の近況の一端を紹介します。

### 佐藤 信さん (第2期生2010年度専攻科修了)

RSSC修了後2年、現在小生二つのボランティア活動で忙しくしております。一つ目は外国人老若男女の日本語学習のお手伝いをしています。スーパーのチラシを理解したい方から新聞社説を持参しての意見交換会など毎回楽しんでおります。



二つ目は市の自治基本条例策定協議会活動です。地方分権化の時代、自分たちの住む街を自分たちでより良くし、次世代そして次々世代に引き継ぐため、どのような街づくりをすればよいのか。各世代からのご意見をお伺いするたび、世代間の考えの違いを痛感しながら条例策定に向け活動している昨今です。

### 堤 静香さん (第2期生2010年度専攻科修了)

#### 「RSSCから啓発活動へ」

がん患者の私は2009年に「希望の種」を求めて入学し、専攻科卒業迄にテレビ出演や講演会等、多くの活動の場を頂きました。重粒子線治療によってがんから生還した体験談をお話する事で、希望や勇気を得たという予想以上の反響は、その後の私の「重粒子線治療普及活動」に繋がり生きがいになっております。



現在は放医研や、九州国際重粒子線治療財団、第一生命等から講演や、パンフレット、ビデオ撮り等のご依頼があり活動させて頂いております。がんや他の病気でお悩みの時は傾聴ボランティアの私をご利用下さいませ、お役に立ちたいです。

### 中嶋 和子さん (第4期生2011年度本科修了)

東北大震災のあった年に入学し、その様な大変な状況の中で学びの場を得られた事の贅沢さ、有り難さに感謝しています。又、学びたいと思っている



同年輩の人達がこんなに沢山いた事に驚きもしました。RSSCでの学び・先生や友との触れ合いが、自分の人生を振り返り、自分のやるべき道に進む事へ覚悟をもって決心させてくれました。

同窓会や研究会等へ参加することによって、RSSCとの繋がりを保ちつつ、学んだ事を友人に話したり、また、少しでもお役に立ちたいと思い、学校や個人の方からのご依頼で、グループでの点字点訳のボランティア活動中心の充実した毎日を送っています。

### 筒井 俊英さん (第2期生2010年度専攻科修了)

専攻科修了の直前、不規則な生活に陥りたくない…との考えから再就職を決め、まだまだ学びたい…との思いから出身大学が運営する研究塾を受験。今はく週2～3日の通勤+2日程度の通学+OFFは自遊人>というリズムを楽しんでいます。



「仕事、は経験知を活かし、”学び、では講義のほか若者たちと一緒に活動(東北復興支援など)も行います。

RSSCの2年間は、学びの不足感が補えただけでなく、会社人間だった自分の殻を柔軟にし、拡げてくれました。様々な気づきや多くの友との邂逅は潤いをもたらし、現在も貴重な私の財産となっています。

### 碓井 達三さん (第3期生2011年度専攻科修了)

私の修了論文のテーマは「高齢者における生涯学習の一考察～なぜ高齢者は学ぶのか～」であり、学んだ後の成果をどのように社会に生かすかということの重要性を論じたものである。



私自身今まで地元との関わりは全くなかったが、昨年11月から地域の市民館が毎週水曜日に開設している「生涯学習相談ルーム」の相談員(ボランティア)を月2～3日程度ではあるが始めている。地域社会の人々との触れ合いの中で、ささやかな社会貢献がスタートできたと思っている。これを一つの契機として、これからも何ができるかを考えていきたい。

### 門田 信愛さん (第4期生2011年度本科修了)

今、私は千葉市の外郭団体で主に中小企業事業主の経営相談業務を行っている。RSSCで学んだこと……。一言でいうと、「自己表現力」が身についたことだと思う。授業やゼミを通して、自分の感じたことを素直に伝えられるようになった。



日々の相談業務の中で、時には「人生相談」にまで進展してしまうことがあるが、相談者に寄り添い、じっくり話を聞き、アドバイスができるように心がけている。「社会・人」とのつながりが、自分の「生きがい」にもなっている。これからの人生も、しなやかに、自分らしく生きていきたい。

☆かがやきライフ研究会

「すずかけの小径」第3号発行

かがやきライフ研究会は、立教セカンドステージ大学が発行しているニューズレターVol.1に携わった広報委員会の有志が、修了後もRSSCで学んだことや、その思い出などをエッセイとして書いて、学内外の人々にも読んでもらいたいとの思いで2009年に設立し、小冊子「すずかけの小径」を年1回発行しております。創刊号、第2号、第3号ともに、自分の生き方、病気に立ち向かう体験記、ボランティア体験記、バングラデシュの障害者への支援活動のお願いなどの記事を掲載しておりますので、皆さんもぜひご覧ください。現在、第4号の作成中で、「環境」をテーマに「ツバル」の留学生からのレポートを含め、環境対策の取り組み実例を取材しています。



☆第4回RSSC同窓会総会開催

5月18日に第一学生食堂で第4回の同窓会が開催され93名が出席しました。御守陽治会長の議長の下、2011年度の事業報告、決算報告、役員改選、2012年度の事業と予算が審議され、無事終了しました。同窓会は、同日現在第1期生から第4期生までの342名（修了生の96%が加入）に達し、親睦と啓発・研究の多種多様な行事が展開されています。



総会に引き続き、立教学院 糸魚川順理事長（写真）の記念講演会が開催されました。「リー・クアンユーの悩み」と題して、1965年独立後、小国シンガポールを今日の繁栄に導いた歴史と、日本との密接な関係が紹介され、今は、シンガポール独自のアイデンティティをいかに高めていくかが課題であるとのお話がありました。

そして、遅くまで同窓生の語らいが続き、旧交を温め絆を深めた総会でした。

— 編集後記 —

ニューズレター9号では、チャペルでの開校5年目の入学式から始まったRSSC生活の生き生きとした日常と、修了生の社会活動の一端を紹介しました。

《ニューズレター9号編集委員》（五十音順）

有吉一夫 井口克彦 市ノ澤信夫 岩寄貴美子  
岩田誠 遠藤千秋 大竹敦子 小川文男 笠原康次  
神崎多美子 清水光昭 庄司信明 菅原輝美  
田谷文雄 辻榮一 堤さと子 成田良一 橋本典子  
長谷川洋 増田竹夫 光宗英子 山下忠和

☆高齢者総合福祉施設訪問

私達にとって、親をはじめ高齢者の介護は切実な問題です。それはまた、高齢社会をどう生きるかという、私たち自身の問題でもあります。そこで第4期生の有志が企画し、総勢40名が8月1日に東京都立川市の『社会福祉法人 至誠学舎立川（高齢者総合福祉施設 至誠ホーム）』（ホーム長 橋本正明先生・ゼミ担当教員）、8月2日に群馬県高崎市の『社会福祉法人 新生会』（理事長 原慶子先生・元RSSC講師）を訪問しました。橋本先生、原先生から直接のご講義と共に施設入居の方々と接する等、非常に有意義な実地学習をしました。至誠ホームではサポートセンター登録の「ウクレレ合唱団<鈴懸>」（写真）が演奏を披露し、大変好評でした。



☆丸の内界限と三菱一号館美術館訪問

「暮らしに役立つ経済と金融」の授業の課外活動として、日本銀行・東京証券取引所・丸の内界限と三菱一号館を見学しました。特にユーロ危機や日本経済・株式市場の低迷の最中のタイムリーな企画となりました。

6月26日（火）は、受講生15名が参加し日本経済の表裏ともいえる丸の内のオフィスビル群をめぐり、緑の皇居前広場をしばし散策。洒落た中庭を通過して、完全復元された赤レンガの三菱一号館美術館に入館。19世紀イギリスの詩情に満ちた静謐な画風で知られるバーン・ジョーンズの日本初の個展に魅せられました。昼食は一号館カフェテリアでRSSCの学びを中心に楽しい会話が弾み中、名物メニューを堪能。CSRの一環として大変充実した課外活動となりました。



☆最後まで自分らしく ～現代の葬送と墓～

小谷みどり先生の授業、「最後まで自分らしく」のフィールドワークである「墓地見学」を54名で行いました。場所は巣鴨の「すがも平和霊苑」。この授業は社会学や民俗学、医学、法学など、さまざまな角度から死をめぐる現代社会の問題を取り上げています。昨今はお墓事情も変化しており、住職のお話を聞きながら、一同驚いたり頷いたりでした。



墓地にお騒がせしてしまったことを詫言しながら後にし、皆で今の世の出会いに感謝して乾杯をしました。